蟷螂の斧

Mamama

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

司る死の形は絶望。
相手も己も。

目次

Ⅴ　23
Ⅳ　17
Ⅲ　11
Ⅱ　6
Ⅰ　1

I

「ちょっ！　待っ――――！」
「うるせえよ」
　歯向かっておいて今更命乞いでもしようというのか。戦意は無いというように斬魄刀を放り捨てた破面だが、そんなことはお構いなしに脳天に一撃をくれてやる。
　斬魄刀を抜いた時点で――――いや、掃討命令が出た段階でこいつ等の命運は既に決まっている。
　ごきゃ、と頭蓋骨を破壊する手ごたえがあって一瞬遅れて湯水のように噴き出る血液。
　びくん、と身体が震えたかと思うと無事な胴体だけが無様に砂漠に倒れ伏す。
　少しだけ身体が痙攣して、直ぐに動かなくなった。耳障りな聞き苦しい声は聞こえない。頭を潰したんだから当然だ。
「チッ、雑魚が」
　もう動かない肉塊に向かって吐き捨て、周りを見渡す。
　死体死体死体。死体の山だ。頭が潰れたり上半身と下半身が泣き別れになったりした破面共の死体。先ほど潰したのが最後の一匹だったのか、もう動くものはない。

「ああ――――詰まんねえ」
　溜息を吐く。今回もまたつまんねえ任務だった。疲労なんてないくせに疲れた気分に陥ってくる。斬魄刀に付いた血痕を振り払い、砂の大地に突き刺す。
　苛々する。何かに苛立っていて、その原因は分かっていない。意味もなくイラつく自分にも苛々して、悪循環が発生している。
　何もかもが馬鹿らしくなって適当に寝転んだ。死体の山の中だが、そんなものに頓着するほど細い神経はしていない。
　砂漠のど真ん中で上を眺める。
　夜だ。碌に光源の無い世界の夜空に三日月が煌々と輝いて、その周

りには名前も知らない星々が瞬いている。見るヤツによっては趣のあるものかもしれないが――生憎、そのようなものを楽しむほど情緒に溢れているわけではないのは自分でも分かっている。

だから、特に感想は出ない。ただの夜。時間を持て余して特別やることもないから月を眺めているだけだ。そこに感慨はなく、思うこともない。

じゃあなんで意味もなくこんなことをしているのかというと、平たく言ってしまえば暇つぶしだ。

それ以上でも以下でもない。

「……」

暫くそうしていた。無音の世界は意外と心地よく、そのまま眠気に身を任せたくなる。そんな静寂に斬り込むかのように砂を踏む足音が一つ。

誰かが近づいてきている。こんなもの態々探査神経で探らせるまでもない。敵だったらこんな死体だらけの物騒な場所に無警戒にのこのこ歩いてくるわけがない。

そうすると必然的に近づいてくるのは一人しかいない。上半身を持ち上げて音の方向に視線をやると、予想通りに視界の端に一人の破面が映った。右頬に水色の仮面紋が入った、男の破面。

ゆっくりと、しかし確かな足取りで近づいてきたソイツは近くまで近寄ると歩みを止める。

「残党は？」

念のため聞いておく。面倒だが、一応は任務だ。反乱分子の掃討なんていう、よくある任務。最初の頃は堂々とぶっ殺せるからアリかと思っていたが、どいつもこいつも歯ごたえが無さ過ぎる。そもそも反乱分子っていうのは大分誇張した表現だ。単なる雑魚が徒党を組んでいるだけの烏合の衆。

加減した一振りで死ぬような雑魚なんざいくら殺しても意味がない。単なる作業だ。二回目以降からやる気を失くして、適当に暴れた後は他の連中に残党狩りを命じてある。

今回もまた、そうだった。

「……打ち漏らしはない。全部、狩り切った」
硬い声色でソイツは言った。今更戦闘で緊張するほど柔じゃないだろう。大方、今回の任務に思うところでもあるのか。
「ハッ、そうかい。……そりゃそうだ。真っ先に逃げるような腰抜けがお前に敵うわきゃねえよな」
「ああ、そうだな。特に苦戦はしなかった」
コイツのことはそれなりに評価している。俺と勝負出来るほどの霊圧じゃねえが、少なくとも戦いもせずにビビって逃げた雑魚が敵うような相手じゃない。
そこで一度会話は止まった。ソイツは迷ったように、僅かな逡巡の後に口を開く。
「月を見ていたのか？」
と、そんなことをを聞いてきた。
「あァ？　……まぁ、そうだがよ」
事実なので否定しない。確かに、月を見ていた。
……いや、見ていたというのは少しばかり語弊があるか。単に視界に入っていただけだ。
月はデカくて目立つ。だから、自然とそこに視線が行く。きっと、ただそれだけだ。
「それがどうした？」
「いや、もしかして趣味なのかと思ってな」
見当違いの言葉に僅かに苛立つ。
「……あァ？　俺がそんな女々しい趣味してると思ってるのか？」
「いや、そういうわけじゃないが……」
破面が夜空を見上げた。そいつは頸を傾げて暫く上を眺めていた。
「良い、夜景だと俺は思った。俺に審美眼があるわけじゃないが、きっと美しい月というのはこんな月を言うのだろう」
俺と同じものを見ておいて浮かんだ感想はそれらしい。悪いが、その感性に理解を示すことは出来ない。
「……そうかよ。死体の山が転がっているのにお前も冷徹じゃあねえか」

煽るように言ってやる。ちょっと霊圧を解放してやったら連中は身体を強張らせてろくに動くことも出来なくなった。後のことは戦いでも虐殺でもない。刀を振り下ろすだけの単純作業。今となっちゃ霊子に帰るのを待つだけの肉塊だ。

波面は少しだけ苦しい顔を浮かべる。その意味を理解は出来ても共感は出来ない。

「それが任務だからだ。……個人的にはあまり気が進むものじゃないが……」

「真面目なこった。まァ、良い」

正直に言って、こんな雑魚共を態々殺しにかかる理由は俺にも分からない。

藍染サマに従わないだけ十把一絡げが徒党を組んで攻めてきたとしても障害にすらならないだろう。東仙あたりなら秩序の為、などと抜かしそうだが実に馬鹿々々しい。

俺達破面に秩序なんて概念が芽生えるはずがねえ。結局は獣でしかない俺達は食うか食われるか、ただそれだけだ。

或いは――――。

……まぁ、そんなものはどうでも良い。小難しいことを考えるのは趣味じゃないし、意味もない。

ともあれ、任務は終わった。だったらこんな場所からは退散するに限る。

血の臭いは別に嫌いじゃないが、流石にここまで濃密だと次第に鼻が不愉快になってくる。

立ち上がって、突き刺した斬魄刀を引き抜き肩に背負う。

「帰るぜ。後の報告は任せた」

「……ああ。分かった」

後ろから着いてくる一つの足音。静かで、確かな意思を感じさせる音。その音に最近慣れてきた。

前にはもっと破面がいたと思う。追随する足音がもっと聞こえていた気がした。

……ああ、そうだ。

もう、顔も憶えちゃいないが、媚び諂った雑魚共が何人かいた。
他の連中はもういない。何人かは俺が殺して、何人かは戦いの中で死んだ。
そんな中後ろを歩く破面だけは生き続けた。運が良かったってのもあるだろうが、他の連中に比べりゃまだ使える雑魚だってのもある。
少なくとも下心が透けて見えるおべっかを使うような雑魚よりはマシだ。態度は実直で気色の悪い態度を取ることもしない。細かい雑務もコイツが勝手にやってくれる。だからコイツに限っていえば煩わしさはあれど邪魔だとは思っちゃいない。
「――……」
そういえば、と思い出す。一度足を止めて振り返った。
「どうした、ノイトラ?」
きょとんとした顔をする破面。
ノイトラ――そう、俺の名前だ。ノイトラ・ジルガ。藍染によって破面化された、破面の一人。
「お前、名前は?」
俺の問いにその破面は何とも言えない妙な顔をした。
「……テスラ。テスラ・リンドクルツだ。一応、同時期に破面化した一人なんだが……」
悪いが自分より格下と分かっている有象無象の名前など覚えておく価値がない。
だが、この波面は少なくとも見どころはあるだろう。
「そうかよ。覚えておくぜ」
「寧ろ今まで覚えていなかったのか……?」
破面――テスラのぼやきは無視した。
ただ、暫くその名前だけは憶えてやろうと思った。
コイツが死ぬ、その時までくらいは。

II

「ノイトラ・ジルガ。お前は何の為に戦う？」

虚夜宮の廊下で面倒臭いのに絡まれた。アフロが特徴的な第７十刃、ガンテンバイン・モスケーダだ。藍染が率いる十刃で序列は七番目。今の俺からすれば……腹立たしいが格上の相手といえる。そのガンテンバインが俺の進行方向上に仁王立ちをしており、通路を塞いでいる。単なる偶発的な遭遇ではなく、待ち伏せをしていたことは明白だ。

「……知ったことかよ」

舌打ちをして脇から強引に通りぬけようとするが、制止させるようの肩に手が置かれる。大して力は込められていないが、逃げることは許さないとでもいうような、強い意志が込められているように感じた。じろりと睨みつける。

「……離せよ。テメエにゃ関係ねぇことだろうが」

「関係はあるぜ。俺達は同胞だが、お前の在り方は危険すぎる。今日お前がこなした任務のことだ」

「それが関係ねえって言ってんだよ。大体、殲滅しろって任務を忠実にこなしただけだぜ？　一体なんの問題がある」

そう。別に俺は独断専行したわけではない。殲滅しろという命令通りに職務を全うしただけだ。

だからどうこう言われる筋合いはないし、これに関しては無茶苦茶な論理を展開してるわけでもない。

そんなことはコイツも分かっているはずだ。それでもなお俺の前に顔を見せたということは、要は殺し方やらなんかに物申したいのだろう。

馬鹿々々しい。殺すんだったらそこに至るまでの過程なんざ関係ねえ。

上品に殺すことがそんなに上等かよ。

俺もお前も、破面になる前は獣みたいにその同胞とやらを食い散ら

かしてきたっていうのに。
　手を振り払って数歩歩くとガンテンバインがまた目の前に現れた。
響転だ。
　前にも一度、こんなことはあったが響転まで使ってくるということはコイツもそれなりに覚悟を持って俺に接触してきたということか。
　だが、そんなものは俺には関係がない。神経を逆なでされただけだ。
「テメエ……！」
「オイオイ噛みつくなよ。俺はただ、お前の真意を知るために問うているだけだ。そんなに気になる質問をしているか？　お前は一体何にイラついている？」
「何に、だと？　知るかよ」
　一体何にイラつくのか、そんなものは俺だって知らないし分からない。
　分からないことは分かっている。誰とも知らない他人に指摘されるのは本当に腹立たしい。
「オラどけ。テメエと遊ぶくらいなら剣振ってた方が有意義なんだよ」
　別にこれから鍛錬する予定はない。いや、そうしてもいいがそうじゃなくても良い。ガンテンバインを撒くための適当な方便として放った言葉に過ぎない。
「……そうか。なら丁度良いな」
「あ？」
「ノイトラ。ちょっと付き合えよ」
「……」
　そう言って、微かな好戦的な笑みを浮かべるガンテンバイン。
　率直に言えば。ガンテンバインの言葉に従うのは癪だが、惰眠を貪るよりはまだ有意義な時間になるだろう。雑魚をいくら殺しても価値はないが、ガンテンバインとの闘いには少なくとも価値はある。
　僅かに逡巡し、思考していたせいだろうか。背後から来る足音に気づくのに一瞬遅れた。

「ノイトラ、どうした？」
なんとタイミングの悪い。何も知らないテスラがひょっこりと顔を出して、ガンテンバインの顔を見るなり顔面が硬直する。
「ん、お前は確か……」
「……Ｎｏ．５０、テスラ・リンドクルツです」
「ああ、そうだった。確かコイツと同期だったな」
「え、ええ。そうです。……ノイトラが何か？」
「おい」
テメエは俺の保護者か。お前こそ関係ねえのにしゃしゃり出てくるんじゃねえ。
「ん？　別にノイトラが何かしたわけじゃないぜ？　コイツがこれから鍛錬するって言うからよ、誘っただけだ」
「そうですか。……良かったじゃないか、ノイトラ」
「勝手に出てきて適当なこと抜かしてんじゃねえよ、殺すぞ」
半ば本気だった。流石にテスラもそれを感じ取ったのか、気まずそうな顔で一言謝罪の言葉を口にする。テスラから見た俺がどう映っているのかなんて興味はないが、大方俺の事を強さに飢えた戦闘狂とでも思っているんだろう。
嗚呼、けど違うんだよ。
戦いに飢えているわけでも、戦闘狂なわけでもない。
俺は、ただ――――。
……。
ただ、なんだ？
「おいよせ。テスラに悪気があったわけじゃねえだろう」
「うるせえ」
咎める声にも腹が立つ。ああ、本当に煩い。どいつもこいつも。知ったような顔で語りやがる。
もう少しで何かの手がかりを掴めそうだったのに。
踵を返す。そもそも俺はガンテンバインが嫌いだ。嫌いなヤツと話をして気分が良くなるはずがない。
十刃なんて俺からすれば全員イラつく連中だが、順位をつけるとし

たらその中でもガンテンバインの事が一番だろう。
何か因縁があるわけじゃない。ただ、オレはコイツの態度が一等気に入らない。
その理由も、俺には分からない。
「おいノイトラ」
「鍛錬するんだろうが。クソ、付き合ってやる」
逃げたと思われるのも気に食わない。お望み通り付き合ってやる。
「言っておくがよ、いくら十刃だからって舐めるなよ。俺の牙はお前にも届くってことを証明してやる」
「おい、ノイトラ」
咎めるようなテスラの声を無視する。偉い十刃サマに対する態度がなっていないとでもいうつもりか。余計なお世話だ。
「構わねえよ。それに跳ね返りのあるやつは嫌いじゃねえ」
嗚呼、煩い。何もかもが煩わしくて、それに頭が痛くなってきた。ガンテンバインの頭でも砕けば、少しは気分も晴れるだろうか。
虚夜宮から一歩出ると広がるのは一面の砂漠だ。
遠くにはメノスの森やらなんやらがあるが、少なくともここら付近には何もない。石英みたいな植物と小動物みたいな虚がちょくちょくいる以外には何も。
まともな遮蔽物がないこの場所は身体を動かすには丁度良い場所だ。
城を出て少し歩く。先頭は俺でガンテンバインが続く。最後尾にはテスラが気まずそうな態度で追随している。
立ち止まる。振り返ると虚夜宮が小さく見えた。ここまで来れば派手に暴れても問題ないだろう。
「じゃあまあ模擬戦と行くか。っても殺し合いをするつもりはねえからよ。解放は無しだぜ。おう、テスラ。審判頼むわ。ヤバイと思ったら止めてくれ」
「は、はい」
ガンテンバインはそう言って構える。俺の三日月状の矛と比べると貧相な斬魄刀だ。

俺も人の事を言えないが、それは果たして斬魄刀と言えるのか。拳に握ったそれは特殊な形状だ。
「……」
ガンテンバインの戦闘方法は良く知っている。拳による近接格闘を主体に組み上げた戦闘技法。
帰刃をするとガラッと戦闘方法が変わるが、今この場じゃ考慮しなくていいだろう。
鋼皮は俺の方が上。俺の鋼皮は十刃の上位にも通用する。速度で負けているとしても勝算はある。
とはいっても相手は腐っても十刃。俺の鋼皮を貫く算段くらいは付けているだろう。
歩いてる間、コイツとどう戦うのか頭の中でシミュレーションはやり尽くした。勝算は、有る。
背中に背負った斬魄刀を正眼に構える。それを見たテスラは複雑そうな顔で跳んで距離を取った。
「戦いの中でしか分からないことがある。特にお前相手ならそうだと思ったんだが、どうだ？」
「……」
目の前の敵が何か言っている。敵の言葉に耳を貸す必要はない。殺し合いだ。言葉なんてものは勝った後の骸にでも吐き捨ててしまえば良い。
「別にお前の性根を叩き直してやろうなんて物騒なことを言うつもりはねえが――――」
ガンテンバインは一度構えを解き、短く胸元で十字を切る。
「先輩として胸を貸してやるよ。掛かってこい」
言葉が終わると同時、俺は地面を蹴り刃を振り下ろした。

Ⅲ

模擬戦だの訓練だのまどろっこしいことは言わない。殺す。
踏み込んだ一撃はガンテンバインの頭部に吸い込まれ――――その直前でガンテンバインは消えた。
響転だ。横に気配を感じ、切り返す。直撃すれば真っ二つに出来るほどの威力のそれはまたもや態勢を低くしたガンテンバインに避けられる。
「初っ端から殺す気とはいい度胸じゃねえか！」
「チッ！」
ガンテンバインはそのまま踏み込み、正拳突きを放つ。至近距離では長物の利点を生かせない。
一度後退し、拳は柄で引き気味に受け止める。
衝撃。斬魄刀を持った手が痺れそうになるほどの威力に俺は少し笑った。
「ハッ！　なんだよ。そんなこと言っておきながらテメエだって全力じゃねえか」
「なんだ？　手加減でもしてほしかったか？」
挑発するように笑うガンテンバインに頭を振る。
「まさか」
寧ろその逆。下手な手加減でもしようものなら最大威力の虚閃の一発でもお見舞いしてやろうと思っていたほどだ。
「オラ、来いよ。十刃サマがこんな温い攻めなわけねえだろ」
「フ、良いだろう。先達者の技巧を見せてやる」
言葉が終わるや否やまたしても消えるようにガンテンバインは俺の視界から消えた。
「舐めんな！」
響転の速さはある。だが練度については大きな差があるわけじゃない。
目で追える。身体は反応出来る。なら勝算はある。
弾き、躱し、留めなく繰り出される正拳の合間に一撃を差し込む。

そんなやり取りを数度した後で、ガンテンバインは一度距離を取った。
「やるじゃねえか。予想以上だ。獣染みた動きでありながら上手さもある」
「上から語ってんじゃねえよ」
「……腕前は認めるがその態度はいただけねえ。不用意に敵を作ってどうするよ。お前はもうちょい立ち回りを覚えろ。……だが、やはり分かんねえな。単なる戦闘狂かと思いきやそれだけじゃねえみたいだ」
「お前に俺の何が分かるってんだ」
「さあな。だが立ち会ってみて少しは分かることもある」
ガンテンバインは俺を見た。
「お前、別に戦いが好きなわけじゃねえだろ？　いや、好きか嫌いかで言えば好きだろうが、そんな単純な話でもなさそうだ」
「えッ」
それは俺ではなく、近くで戦いを見守っていたテスラのものだった。
「……こっち見てんじゃねえよ」
「わ、悪い。でも、そうなのか？」
「知るか」
俺とテスラがそんな間抜けなやり取りをしている間、ガンテンバインは思案気な表情を浮かべて顎を撫でる。
「テメエも知ったように好き勝手言ってんじゃねえよ」
「だが、合っているだろう。純粋に闘いが好きだってんならそんなつまらなそうな顔はしていないはずだ」
「……俺は」
分からない。
そんな俺を見たガンテンバインは溜息をついた。
「俺はなんでも分かるわけじゃねえ。答えはお前自身が見つけるしかねえ。だから最初の問いをもう一度させてもらう。……ノイトラ。お前はなんの為に戦う？」

なんの為に？　それは勿論強くなるためだ。
有象無象の雑魚共を叩き潰して……。
いや、違う。それは強くなることは目的ではなく手段だ。
なら、どうする。俺は強くなって何がしたい。これほどまでに戦いを渇望するのはなんの為だ。
強さの果てに、俺に待ち受けるのはなんだ。
「……」
「模擬戦とはいえ戦いの最中に聞くようなことじゃなかったかもな。悪い。……続きと行くぜ」
再び構え、強引に戦意を高めていく。
……そうだ。集中しろ。今はただ、目の前の敵を。
響転。またしても消えるように移動するガンテンバイン。
――正面、いや……。
フェイントだ。そう判断したのは根拠があってのことではない。直感だ。
向かい打つ態勢を取りつつも左右を警戒。微かに捉えた影に向かって斬魄刀を振り下ろす。
「良く反応した！」
ガンテンバインは俺の一撃を受け流した。
流した衝撃を利用し、くるりと回転しながら蹴りを繰り出す。だが、正拳に比べるとその精度は些か落ちる。俺は斬魄刀を手放し、それを両手で受け止め足を掴むことに成功する。
「そりゃ悪手だぜ！」
そのまま地面に叩きつけようとした俺の動きに合わせ、遠心力を利用したガンテンバインは俺の手から離れ、空中で態勢を立て直しつつ上空から拳を見舞う。
防御は――間に合わない。
衝撃が頭に走り、俺はそのまま鑪を踏む。
単なる拳の一発ではこうはならない。ぐわんぐわんと視界が揺れ、咄嗟に斬魄刀を掴んで杖代わりにする。
「糞が！」

「お前の鋼皮は確かに硬え。だが、それが分かってりゃダメージを与える方法はいくらでもあるんだぜ？　内臓まで硬いわけじゃねえからな」
「先輩面してんじゃねえよ。俺はテメエのそういうところも――」
腰から続く鎖を握り、斬魄刀を頭上で回転させる。腹が立ってくる。自分の不甲斐なさにもガンテンバインの言葉一つ一つにも。
「――気にくわねえんだよ！」
放ったそれは空しく宙を切り、俺の腹部に拳が突き刺さった。
「カハッ……！」
俺の身体は後方に吹き飛ばされ、岩に叩きつけられる。
一瞬、意識が飛んだ。鋼皮の硬さを考えれば岩に叩きつけられた衝撃は大したもんじゃない。ただ拳を打たれた腹部がじくじくとした痛みを訴えている。内臓にダメージがいったのか、口から僅かに血液が流れていく。
「そ、そこま――」
「――止めんなテスラァ！」
成り行きを見守っていたテスラは俺の叫びに身体を硬直させる。
瓦礫を退けて岩から這い出して立ち上がる。
「ノイトラ。だが……」
「これは、俺の戦いだ！」
「……それは。いや、しかし」
「オイオイ。降参しとけって。別に俺も命を取るつもりはねえし。結構効いただろ、今のは」
口の中の不快感を纏めて唾を吐く。
「効いただァ？　この程度で俺が止まると思うな」
効いたさ。頭がぐらついて今にもぶっ倒れそうだ。だが、そんなものは関係ねえ。俺は、まだ負けちゃいねえ。足はまだ立つ。斬魄刀もまだ握れる。
「……しょうがねえ」
「ガンテンバイン様！」
咎めるように叫ぶテスラの声が遠くに聞こえる。視界が揺れる。

平衡感覚が無くなって、千鳥足のように足も揺れる。
　気が付くと、ガンテンバインは近くまで寄っていた。
「確認するぜ。良いんだな？」
「態々下らねえ確認してんじゃねえよ……！」
「そうかよ。……分かった」
　そういって再び拳を握る。
　そうだ。それで良い。
「……ノイトラ。お前が単なる粗忽者じゃねえのは分かった。お前はお前で、自分の道を探す求道者か」
「求道者？　俺がか？　さっきから言ってるだろうが。分かったような口を利くんじゃねえってな！」
　そうして再び戦端は開かれた。

　ガンテンバインにとってノイトラ・ジルガという破面は率直に言って好感情を抱く人物ではなかった。
　命令違反はごく当然のように行われ、卑怯な手段も有効であれば使う。
　しかしそれは報告から来るノイトラに対する印象であり、実際にそれを目の当たりにしたわけではない。だからこそガンテンバインはノイトラに戦いを持ちかけたのだ。
　一体何の為に戦うのか。その真意を問うために。
　目標は達成された、どころか寧ろその在り方は難解さを増した。
　単なる戦闘狂ではない。格下を一撃で殺し切る姿は殺戮を好む破綻者でもない。それでも戦場を望むならば、きっと戦場に答えを探しているのだ。
　自身でも理解が追い付かない何かを戦場で探している。そんな印象を受けた。
　故に難解だ。自分の力を誇示するだけの小物であれば、この戦いは単なる教育だ。
　しかし事はそう単純ではない。玩具にはしゃぐだけの子供ではな

い事は分かった。
ならば、決着はどう持っていくのが正しいか。
「……これもまた神の試練か」
獣染みた咆哮を上げながら苛烈に攻め立てるノイトラをやり過ごし呟く。
ノイトラは強い。技巧は自身の方が上だという自負はあるが、純粋な身体能力であればノイトラの方が上だ。手加減して容易に勝てる相手ではない。
とはいえ。
「……限界か」
ノイトラの呼吸は荒く、意識が朦朧としていて視線は定まっていない。ガンテンバインも余裕綽々ではない。少なくない汗が流れ、相応に消耗している。
「ノイトラ。お前は強かったぜ。一人の破面として手合わせ出来たことを感謝する。この勝負は俺にとっても得難い価値があるものだった」
だから、もうそろそろ良いだろう。
そう語り掛けるが、反応はない。
ぼうっとした態度のまま、震える手で斬魄刀を掲げる。何かに祈りを捧げるように。
「お前、まさか……！」
「――『祈れ』」
ぞわりとした悪寒を背に、その言葉を聞いた。

Ⅳ

祈るという言葉が嫌いだ。
それがいくら真の力を発揮するための解号であろうと。俺はその言葉が気に食わない。
解号は適当な言葉を並べればいいってものじゃない。己の力の核を解放する言霊だ。
その言葉が何故、『祈れ』なのか。
一体誰に祈るのか。
一体何に祈るのか。
祈ったところで、何の意味があるのか。
意味なんてねえよ。なら、なんで祈る必要があるのか。

嗚呼、頭が痛い。
ガンテンバインに手痛い攻撃を食らって脳震盪を起こしているのか、考えは取っ散らかっては明後日の方向に広がっていく。
……いいや、違う。解放して傷は癒えたにも関わらず頭は鈍痛を発している。
「……ノイトラ。解放は無しだと言ったはずだぜ」
警戒を込めたガンテンバインの言葉に俺は四本の腕を軽く眺めた。
「……」
衝動的だった。朦朧とした頭は敵を殺せと訴えて、それに従っていたら解放していた。
「テメエも解放しろよ。それで良いだろ」
「いや、よかねえよ。お前はここで本気の殺し合いをするつもりか？
流石にそれは看過できねえ」
「温ィこと言ってんじゃねえよ。俺達が武器を取った段階で殺し合いと変わらねえだろ」
そうだ。俺は殺すつもりだった。模擬戦闘なんて甘いことは言わない。コイツが少しでも油断するようだったら叩き潰してやるつもりだった。

それは今でも変わらない。
「……やめようぜ。勝敗は決したんだ」
「俺はまだ生きてる。戦える。それで勝ったつもりか」
餓鬼かよ、とガンテンバインは溜息を零す。
「ルールを設け、その範疇で競い合った結果だ。受け止めろよ。……お前は強くなる。けど、今は俺の方が強かった。ただそれだけの話だ」
ああ、それは正しいんだろう。ガンテンバインが正しく、俺が間違っている。
だけどな。そんな言葉一つで足が止まるほど、俺は賢くないんだよ。
「止めとけ。お前、解放後だって戦い方が変わるわけじゃねえだろ。俺が解放したらさっきの焼き増しだ」
正論だ。今の俺じゃきっと、コイツには勝てない。四本の腕はガンテンバインに届かない。
「だからなんだ。テメエは勝てる勝負しかしねえのかよ」
そうだ。勝ち目が薄い戦いだろうがなんだろうが、終わることは出来ない。
道は未だ分からない。俺がどの道を歩いているのか分からない。この行いが正しいのかどうかも分からない。
ただ、意地を通すってのはそういうことだ。
中途半端に矛を収めるくらいなら初めからやる必要はねえ。
ガンテンバインの言葉を借りるなら……どうも、俺は戦闘狂ってわけじゃないらしい。
それでも俺は闘争を求める。何の為に？　それはまだ分かんねえ。
ただ、結局のところそれこそが俺の求める答えに帰結するもんだとなんとなく思う。
だから、戦うことは止められない。
「いくぜ」
構える。四本の刃の先には敵がいる。今はそれだけで十分だ。
「……駆けろ『龍掌』」

ガンテンバインの姿が変化する。アルマジロを彷彿とさせる、解放の姿だ。
示し合わせたわけではないのに、足を踏み込んだのは同時だった。
一瞬の空白の後、轟！　と音が響き俺の四本の腕が砕け散る。
「……」
腕も刃も俺の霊圧が続く限り再生できる。ただ、四連撃の後の五撃目は腹部に食い込み、俺は血反吐を散らした。
強制的に解除される帰刃。勝負は、ここに決した。
内臓が掻き回されたように痛い。暫くは戦えないだろう。
膝を付きそうになるが、それを強引に押しとどめる。単なる気合だ。
「……俺の負けだ」
「ようやく認めやがったか。このはねっかえりが」
苦笑するガンテンバインを睨みつける。
「だが、俺は生きてる。忘れんなよ、いつかテメエの首を狩り落して十刃の座を奪ってやる。その時まで負けるんじゃねえぞ」
「おう。……ま、俺もそれまで腕を磨いておくさ」
同じく帰刃を解除したガンテンバインの死覇装は一閃した後が残っていて、切れた布がひらひらと踊っている。
それを見て満足したわけじゃない。結局、ボロ負けだ。
ただ、ほんの少しだけ頭痛は晴れた。
急速に揺らいでいく意識。気づくと砂の地面が迫っていて俺は前のめりに倒れていた。
ノイトラ！　と焦るようなテスラの言葉を最後に意識は反転した。

「何、アンタ。こんなところに何の用？」
三桁の巣に足を踏み入れるなり、チルッチ・サンダーウィッチに絡まれた。腰を低くし、腰の斬魄刀に手を伸ばしている。既に臨戦態勢

だ。
　もっとも、俺のようなヤツがいきなり住処に来たらその反応も最もなもんだが。
「テメエに用はねえよ。どけ、女」
「あ、ちょっと！」
「――なんだ、騒がしいな」
　俺がチルッチを押しのけるのと奥からガンテンバインが出てくるのは殆ど同時だった。
「……よう、ノイトラ」
　俺の姿を見るなりどこか気まずそうに声を掛けるガンテンバイン。
「ちょっと付き合え」
「……おう。良いぜ。チルッチ、ちょっと出てくる」
「ちょっと、大丈夫なの？　ノイトラよ？」
　後ろでチルッチが喚いているが、あんな雑魚のことはどうでも良い。
　思いの他、素直にガンテンバインは着いてきた。外に出る。あの時の場所だ。別に思い入れがあるわけじゃない。ただ、都合が良い場所を探していたらそこに辿りついていただけの話。
「テメエ、俺以外に負けてんじゃねえよ」
　俺が声を掛けるとガンテンバインは意外そうな顔で驚いて、頭を掻いた。先日、ガンテンバインは破れ、降格した。十刃落ちだ。ゾマリとかいう破面に負けたコイツは一命をとりとめたものの、十刃ではなくなった。
「……ああ。悪い。だが意外だな、お前が態々そんなことを言うなんて」
「うるせえ」
　あの時の言葉は単なる口約束。それを律儀に守る必要はない。
　だが、苛立つ。本当なら俺がコイツをぶっ殺して十刃になるはずだったのに、予定が狂った。
「構えろ」
「おう」

あの時の焼き増しだ。テスラはいないが、構図は同じ。
互いに駆ける。速度は互角。しかし、
「くっそ……！」
苦悶の声が上がったのはガンテンバインの方だった。俺の攻撃を受け流し切れていない。
あの時とは違う。俺は霊圧を上げ、技を磨き、更なる高みに登った。
ガンテンバインが弱くなったわけじゃない。単に俺の成長速度がガンテンバインのそれを上回っていただけ。
高揚はしない。こうなるだろうな、と薄々分かっていた。
響転にも対応できる。足場を崩すような振り上げにガンテンバインは反応できず、宙を浮く。
そして防御ごと打ち砕く。腕を交差させて多少霊圧を込めたくらいじゃもう、俺の攻撃は防げない。
地面に叩きつけられ、何度かバウンドする。ガンテンバインがようやく態勢を整えた頃には、俺の斬魄刀はガンテンバインの首元に据えていた。
「……」
首は落とさない。俺は刃を引いた。
「殺さねえのか」
「馬鹿が。テメエにそんな価値があるかよ」
敵は殺す。だが、ガンテンバインは敵ではなくなった。
情けを掛けたわけじゃねえ。情けを掛ける価値もコイツにはなくなってしまった。
格付けは終わった。コイツは生涯俺に敵うことはないだろう。
それが分かっただけで、十分だ。
踵を返す。雑魚に掛ける言葉なんてありはしない。
「……なぁ、ノイトラ」
「あァ？」
ガンテンバインの言葉に俺は足を止めた。
「お前の答えは見つかったか？」
俺は言葉を返さなかった。返せなかったし、返すことが出来たとし

てもしなかっただろう。
俺にとってガンテンバインは有象無象に成り下がってしまったんだから。

V

俺は当時の第８十刃をぶっ殺して、十刃の位置に辿りついた。殺した相手の名前なんざもう覚えていない。覚えていないということは、結局その程度の存在だったということだろう。

十刃になったからと言って俺の生活が著しく変化したわけではない。七面倒くさい集会に出る以外は、取り立て今までと変化があるわけではなかった。

ただ――

『十刃にはそれぞれ司る死の形がある。ノイトラ、君が司る死の形は――絶望だ』

「……チッ」

藍染から告げられた言葉が自然に脳裏に蘇ってきて、俺は舌打ちする。

藍染は気に食わない。超然とした態度も、全てを見透かしたような目も、何もかも。

司る死の形は絶望ときた。そんなものは単なる下らない言葉遊びの範疇だが、妙にそれが気にかかる。

その絶望とは俺と相対する敵の絶望か？

或いは――。

「駄目だな、こりゃ」

自分に割り振りがされた宮で適当に寝そべっていたが、そんな気分でもなくなった。身体を動かしたい。

「ノイトラ、どこへ？」

「ちっと身体を動かしてくるだけだ。態々付いてくんなよ」

「いや、それは……分かった」

テスラは俺の従属官になった。俺が指名したわけではない。勝手に従属官になったのだ。

俺にはコイツの思考回路がイマイチ分からない。俺についてきて、コイツの益などないだろうに。

他の有象無象を置くよりかはマシだから放置していたのだが、最近

テスラは俺の行動に口出しをするようになってきた。以前からその傾向はあったのだが、最近はそれがより顕著になり鬱陶しく感じるようになった。
「テスラ、お前なんで俺の従属官になったんだ？」
「は？　いや、なんでと言われてもな……」
ただの数字持ちの中では戦闘力も高く、他に行けば重宝されるだろうに何故俺の従属官なんぞになるのか。
「……いや、なんでもねえ」
斬魄刀を背負いテスラを後目に宮を出る。
虚夜宮の広々とした廊下にはちらほらと下働きの破面共が見えるが、俺の姿を確認するなりこそこそと逃げていく。連中など手を掛ける価値もないというのに必死なものだ。
多くの足音が遠ざかっていくそんな中、反対に俺に近づく足音が一つ。
背後から近づくそれに嫌な予感がした。俺に好き好んで近づきたい破面なんていやしない。例外は俺と同格の十刃だ。そして十刃の中で俺に近づいてきそうなヤツといえば。
「ノイトラ」
「……ネリエルか」
嫌な予感は当たった。ただでさえ良くなかった気分が更に急降下する。
「随分な挨拶ね。別に歓迎を希望していたわけじゃないけど、舌打ちは如何なものかしら」
俺の態度が気に食わなかったのか、ネリエルは不愉快そうな顔で指摘する。ネリエルだって俺と話して愉快な気分にはならないだろうに、何かと俺につき纏う。目下のところ、藍染と同じくらいか、もしくはそれ以上に気に食わない相手がネリエルだ。
「だったら近づくんじゃねえよ。俺は行くぜ」
「藍染様からの命令があるわ」
「あァ？」
「敵性コロニーの調査。私と貴方に振られた仕事よ」

「……へぇ、そいつはまぁ」
きっと俺は笑っているのだろう。先ほどよりかは気分が高揚してきた。仮想敵相手の素振りよりかは有意義な時間を過ごせるだろう。
「もう一度言っておくけど、調査よ。私の方が立場は上。指示には従ってもらうわ」
俺の態度に何かを感じたのか、ネリエルは口酸っぱく繰り返す。
それが殲滅任務とどう違うのか、俺には分からない。敵性とまで理解しているなら潰す以上のことが必要なのか。俺の問いにネリエルは渋い顔を見せた。
「それなりの霊圧が確認されたらしいわ。一応最上級の虚の確認をしてくるように。藍染様はそう仰られていたわ」
「あァ？　そんな虚が今更都合良く在野にいるかよ。いなかった場合は？」
「交渉し、傘下に加えるようにと」
「馬鹿らしい。この後に及んで反乱勢力名乗ってる連中が今更交渉に応じるかよ。で、その交渉にも失敗した場合は？」
ネリエルはまたしても渋い顔を作った。それが明確な答えだった。

酷い場所だ。血に塗れ、肉塊が至るところに転がっている。まぁ、この光景を作ったのは俺なワケなんだが。
「酷ェもんだよなぁ。配下の連中は頑張って抵抗してたってのに頭目は一人で逃げちまうんだから」
「白々しい台詞を吐かないで欲しいわ。嬉嬉として殺してたのは貴方でしょう」
「そいつは悪いな。まさか第３十刃サマが敵前逃亡を許すとは思わなかったからよ」
接敵直後に逃走を図った相手を追う為に持ち場を離れたネリエルに、一人でその場に取り残された俺。直後に起こったのは戦いともいえない虐殺だ。相手は逃走に長けた能力でも持っていたのか、ネリエルが戻ってくるのには少し時間が掛かった。それは俺が血の海を築くには十分な時間だった。

「それに俺だって嬉嬉として殺してたわけじゃねえ。コイツ等の首にそんな価値はありゃしねえ。どいつもこいつもギリアン級だ」
「実力が足りないから殺したの？」
「無抵抗にやられろってか？」
「そうは言わないわ。でも、貴方の実力があれば殺さずとも鎮圧出来たでしょう？」
「出来るぜ。だが、それをしたからって何になる？」
「……」
　押し黙るネリエルに俺は酷くイラついた。
「ネリエル。お前が追った頭目とやらはどうしたよ。まさか逃がしたわけじゃねえだろ？」
「……殺したわ。交渉にも投降にも応じなかったし抵抗してきたから」
　その台詞に俺は笑ってしまった。
「だろうよ。で、お前の殺しは良い殺しで俺の殺しは悪い殺しか？それともお前の愉快な頭の中じゃ頭目をぶっ殺しておいてコイツ等が交渉に応じると思ったのか？」
「そうは言わないわ。……私達は兵士。剣を抜くこともあれば殺さなければいけない時もあるでしょう。十刃である以上、理解しているわ」
　俺達は膨大な屍の上に立っている。進化の為に他者を食らい、陥れて此処にいる。
　俺もネリエルもだ。しらばっくれる真似をするようだったら流石に我慢出来なかったが、そこまでは堕ちていなかったらしい。
「お前が頭目をぶっ殺した以上、交渉は決裂。なら、後は殲滅だろうが。俺は何か間違ったことをしたか？」
「結果論よ。論点はそこではないわ。容易く刃を振るい、虐殺を行う貴方の精神性の如何を問うているの」
「それこそ馬鹿げた話だぜ。俺達は破面、戦う存在だ。敵がいて戦わねえ破面がどこにいる」
　話は平行線だ。互いの価値観が食い違っている以上、お互いが交わ

ることはない。そして迎合出来るほど俺は大人でもない。
だから、こうなるってのは決まり切った話なんだ。
「……私達は破面になり理性を取り戻した。闘争本能だけの獣ではないのよ。なのに――――」
「――――ああ、成程。そういう事かァ」
一目見た瞬間からネリエルが気に食わなかった。コイツとは相容れないと理解した。
女の分際で俺より上にいるからか？　それもなくはない。
向こうも嫌ってる癖に何かと俺に構ってくるからか？　それもあるだろう。
だが、それらの理由はきっと表面上のものだった。ここに来て、俺はようやくその本質に触れた気がした。
「ノイトラ？　……っ！」
轟、と斬魄刀を振り下ろす。ネリエルの頭部を狙ったそれは斬魄刀に防がれる。だが不意打ちの威力を完全には相殺出来なかったようで、ネリエルは片膝を付いた。砂が舞い、その最中ネリエルは俺を敵意に満ちた目で睨みつける。
「……どういうこと？　今、私のことを殺しに来たわよね？　手が滑ったなんて言い訳は通用しないわよ？」
「俺は俺の意思で、お前を殺そうとした。安心しろよ」
「そう。とても、安心出来ない、わね！」
硬質な音と共に斬魄刀がはじき返される。互いに距離が空く。一歩踏み込めば即座に交差する短い距離に。
「一度は許すわ。報告もしないであげる。でも、二度目はないわよ。それでも来るというのなら」
「来るというのなら？」
ネリエルは斬魄刀の切っ先を俺に向けた。
「襲い掛かる火の粉くらい、払わないといけなくなる」
「上等――――！」
――――分かってるんだ。今の俺じゃお前に勝てない。第３十刃と第８十刃、大きく離れた数字は実力の差でもある。

それでも噛みつかずにはいられない。
未だ道半ば。今はただ、強さを追い求めるだけの獣だと認めてやる。
歩く道も分からぬ愚か者だと言われても受け入れてやる。
だが。歩く道程そのものの否定をさせはしない。
それが、今の俺にとっては全てなのだから。